
Short story 2

伶俐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Short story 2

【ノート】

N8902N

【作者名】

伶俐

【あらすじ】

「今から会えないか」それはカムフラージュのためだと思ったのに。
会社の納涼会の2次会を断った彼女が会うことになったのは、同じ会社の同期。でも、2人で話すのは初めて。そして見るのはやはり、初めての顔。

「何か嫌いなものあったっけ。」

そういつてわたしは目の前のテーブルに並んだ料理を眺め、とり皿を手に取った。

「いいよ、そんな気を使わなくても。」

そういつ彼を手で制して、サラダとから揚げを適当に取り分けて彼の前に置いた。

「ああ、ありがとう。」

礼儀正しく彼はそう言ったものの、少し具合が悪いように見えた。

わたしは彼、真崎と一緒に少し証明が落ちた居酒屋のコーナー席のソファに隣りあわせて座っている。というのは、彼から電話がかかってきたからだ。

真崎は今の会社の同期だが部署が違ったため、同期会以外ではほとんど会う事がない。物腰が柔らかく落ち着いていて、話しの方向が逸れたりするとうまく軌道修正したり議論をまとめたりするので、周りから一目置かれる人物だ。

「真崎くん、大丈夫？」

声を掛けて隣の様子を伺う。普段見ているより具合が悪い様子の彼に、ちよつと心配になる。

彼はテーブルの上の水の入ったコップをつかみ、中身を半分ほど飲み干して、コトリとコップを置いた。

「ごめんね、筒井さん。呼び出した上に心配までかけて。」

「ううん、こつちも一次会終わったところだったからちよつどよかったし。」

今夜は納涼会と称した部署の飲み会が開かれていた。たいてい飲み会は週末に開かれるため、部署が違っても飲み会の日程は同じになることが多い。わたしが所属する庶務の飲み会が今夜で、真崎が所

属する総務の飲み会も今夜だった。ちょうど一次会が終わり、二次会の誘いを断っているところで真崎から電話がかかってきたのだ。

『今から会えないか』と。

真崎から電話がかかってきたことにも驚いたが、電話の声がなんとなくいつもと違う感じがして、いや、受話器が拾った周りの喧騒から事情を察して会うことを了承したのだ。

「一次会でだいぶ飲まされた？」

「ああ・・・結構ね。」

答える彼の眉間に若干しわが寄った気がする。

「その分だと、あとの誘いを断るのにもだいぶ苦労したんでしょ。」
わたしが言うと、彼の眉間にさらにしわが寄った。

そして答えないまま、どさりとソファに寄りかかった。

こういふ彼を見ることは珍しい。初めてなんじゃないだろうか。いつも礼儀をかないようにきっちりしていて、周りの誰に対しても丁寧に接している。そう、真崎は優しい。だから同性からも好かれる。異性からはもっと好かれる。でも彼のことだから、たとえ自分にその気がなくても相手を邪険にはできない。

今夜もずいぶん女性に誘われたんだろうが・・・その中に彼の気に入る女性がいなかったのだろう、用事を理由に断ろうとしたのだ。それでトイレにたった時にわたしに電話を掛け、『5分後に電話をくれないか』と急いで言って電話を切った。そのときはまったく事情が飲み込めなかったものの、5分後に電話して事情を知るところとなる。

「真崎くん、筒井だけど。」

『ああ、忘れてないよ。少し遅れるかもしれないけど必ず行くから。』

何を忘れていないと言っただろう？必ず行くって、彼と何か約束でもしていたんだろうか、と思ったときだった。

『えーなにー。真崎君ほんとに約束あるの？2次会行くところよー。』
電話の向こうから聞こえたのは彼を誘う、複数の女性の声。

『だから言つたじゃないですか、約束あるって。ほんとだったですよ。だから今日はすみません。』

『えー、そんなのつまんないよー。』

彼が周りの女性に説明しているのが聞こえる。

ぶーぶー文句を言ってる女性陣。結構彼女たちも酔っているんだろ
うなあ、と苦笑する。真崎はきつと総務で年上の女性にも年下の女
性にも人気があるんだろう。

『10分後に行くから。暑いから店の中で待ってて。』

ふたたび声がこちらに向けられる。うん、ととりあえず返す。する
と。

『真崎君やさしい。』

冷やかすような羨むような、そんな女性陣の声を聞きながら通話を
切った。

この時点では、まさかこの後本当に彼と会うとは思っていなかった。
なぜなら彼の用事は終わったと思ったから。だから通話後、1次会
の店から出て歩き出したときに彼から電話がかかってきて『今から
会えないか』と言われた時には本当に驚いた。

「結構彼女たちしつこくてさ、俺がどこに行こうとするか見てるから職場に戻ることもできないし家にも戻れなくて。」

それで、この店にしたんだ。と、彼は上着を脱ぎ、ネクタイを緩めながら言った。たしかに店の入り口は半地下にあって通りからは見えにくい場所にあるし、店に入ってしまったえば中は薄暗い上に各テーブルは個室に近い状態になっているので誰がいるかはわからない。さすが、できる人はいろんな手を持っているんだなと、そんなところで感心してしまった。

「じゃあ、もう少しここで時間潰したほうがいい？」

「ああ。少し付き合ってくれる？」

「うん。」

付き合って、の言葉に一瞬動揺したけれど、なるべく普通に答えた。

1次会でご飯はあらかじめ食べてきたので、カクテルを頼んで少しずつ、少しずつなめるように飲む。そして再びとなりの真崎をちらりと見た。今は人一人分の隙間を隔てたところに真崎が身を沈めている。最初は向かい合わせに座ろうとしたのだが、真崎が「それじゃあ話にくい」と言ったので並んで座ることになったのだ。確かに真正面で顔をつき合わせて話すのも話しづらいが、隣というものなんだか緊張する。

こうして隣に座って飲むほど、彼と仲が良かった覚えなんてない。真崎の女性関係は知らないが、同期で集まるときは特定の誰かと二人になることを意図的に避けているようでもあったから、彼が女性と二人でいるところは見たことがなかった。それで、どうして自分が今ここにいるのか、わたしには全くわからなかった。

真崎はソファの背に頭を乗せて天井を仰いで、目を瞑っているようだった。その横顔と、あごからのど元にかけてのラインがすごく綺麗

麗だ、と思った。こうして近くで彼を見るのは初めてだけど、ひとつひとつのパーツがすごくきれいなのがわかる。きれいでいて、男性的で、色気がある。

じっと彼を見ている自分に気づいたとき、真崎が目を開けたのでどきりとした。

見ていたのがばれてしまっただろうか。

彼は背もたれから身をおこして座りなおして、少しだけ体をこちらへ向けた。

「俺さ、思ったより大人じゃないらしい。」

「うん？」

「もうちょっとスマートにできるかなーと思ったんだけどさ。」

そう言っただけは、自嘲するように口元で笑った。

「人間関係作るのが下手だって、ようやくわかった。俺みたいな人間って、社会で生きていくのって難しいのかな。」

酔っているんだろう、と思った。彼が弱音を吐いているなんて。

「うわべの付き合いなんて簡単だろうと思ってたしポーカーフェイスも得意だと思ってた。どんなに気に入らない相手でも、それを隠して付き合っただけだ。だからもつと、スマートに世の中渡っただけだ。」

また自分を嘲るような笑みを浮かべながら彼はわたしが飲んでいたカクテルグラスをさっと取り、くいつと一気に飲み干した。あつ、と声を上げる間もなかった。

「うまくいかないもんだね。」

そう言っただけ視線をこちらへ向けてきた真崎を見て、胸が苦しくなった。

切ない顔をしていた。今までにないくらい切なくて、苦しい顔。

真崎は、つ、と視線をそらした。

彼の苦しみがすべて理解できるわけではない。自分に比べたら真崎は多くの人から慕われている分、たくさんの方の顔色をみて行動し、人間関係を調整しながら日々仕事をしているのだろう。その労力は

大変なものはずだ。職場の雰囲気が悪くしないように、仕事を円滑に進めるために。だから彼は人を傷つけられない。そして自分が磨り減っていく。

「何か飲む？」

彼に何を言っついていいかわからなくて、そう尋ねる。ジントニック、と彼は言った。

ほどなくしてジントニックが運ばれてきたが、またしても彼は一気に飲み干してしまった。それを止めることもできず、何も言えず、ただ黙って見ていた。

「筒井、」

さん、がとれて呼び捨てになったことで一瞬どきりとした。

「なに？」

「手、貸して。」

「・・・手？」

彼が言った意味がわからず考えていると、真崎はわたしに近づいて片手をとった。その手を真崎が両手で包み込む。

ものすごく、どきりとした。急に心拍数が上がったのが自分でもわかる。真崎の手は大きくて、わたしの手より少し体温が高い。それを大事そうに両手で包む姿は、胸が締め付けられた。何かに耐えるように、目を閉じて。

「真崎、くん」

「少し、こうしてて。」

耳のすぐそばで響いた声に心臓はまた飛び跳ねた。切ないけど、甘い響きがした。

隣に座る彼との距離は、1？。

少し彼が体をずらした時に肩が触れて・・・彼はこちらに少し体重を預けてきた。

彼は辛いはずなのに、こんなにもどきどきしてしまうなんて。いけないとは思いながらも、こういうシチュエーションになったことの

ないわたしはずいぶん混乱していた。

どうしたら彼を少しでも彼を癒せるだろうか。

そう思ったわたしは、普段なら絶対にやらないことを彼にしていた。空いていた片手で、彼の頭に触れていた。

ぴくり、と彼が動いたことで我にかえり、手を離そうとする。

「そのまま。」

彼の言葉で手を離せなくなり、わたしはそのまま、彼のあたまをなげることにした。少し柔らかい彼の髪を梳くように、何度も、何度も、ただ無言で手を往復させていた。いつの間にか体は向かい合わせになっいて、彼の頭がわたしの肩にこつんとのっっていた。

「いくつになっても、どんなに歳をとっても、大人になれない気がするよ。」

わたしの呟きに彼は何も言わなかったけど、彼の髪を梳きながら続けることにする。

「子供ができたから親になろうとする。後輩ができたから先輩になろうとする。部下ができたから上司になろうとする。そうして社会から見本としての役割を求められるから、その役割を果たすために大人になろうとするんだよ。だから、急に大人になんてなれないよ。」

真崎に言うと言うよりは、独り言のような雰囲気と言う。

「人間だから感情がある。どうしても生理的に合わない人もいるから、しょうがないこともあるよ。確かにそれでも表面上はうまく付き合っていないといけないけど・・・愚痴は言ってもいいんじゃないかな。会社の外ではたくさんたくさん愚痴を言って、会社では知らん顔して付き合う振りして、それでいいと思う。真崎くんは、会社の外でもたくさん気を使ってるでしょ。それを、一部の人にはやめてもいいと思う。やめたってみんな嫌いにならないよ。むしろ、みんなそれを待ってる。」

真崎がわたしの肩から顔を上げて、まっすぐわたしの目を見た。その距離の近さと視線の強さに、心臓はこれ以上ないほど早鐘を打ち始めた。

すると頭がくいと引っ張られて真崎の肩にこつんとあたった。慌てて起こそうとするが、真崎の手がしっかりと頭を抑えていてそれをさせない。もう片方の手はまたしっかりとわたしの手を握っている。

(こんなにくつついたらもう心臓が耐え切れない・・・)

ひとりパニックになりながら、なんとか落ち着こうとひとり心の中で格闘する。

真崎は辛いから、ただ寄りかかって休みたかっただけで、これに深い意味はないんだ。そう言い聞かせるが、なかなか鼓動は落ち着かない。

くすり、と頭の上で笑う気配がした。

「守ろう、って思うのに、いつも守られてるよな。」

つぶやく彼の表情を見たいと思うけど、相変わらず彼の手はしっかりとわたしの頭を押さえつけていて、それをさせない。

「俺よりよっぽど筒井のほうが強くて、優しい。」

ううん、と彼の肩の上で頭を振る。

「いいや、優しいよ。」

そういう彼の声はわたしの心を大きく揺さぶるほど柔らかくて、切なく響く。

「知ってた？」

「なにが？」

「俺が動けるのは筒井がフォローしてくれるって知ってたからだって。」

「えっ……？」

「俺の行動の基盤は筒井なんだよ。」

その台詞は顔から火が吹くほど恥ずかしかった。きつと今わたしの顔は真っ赤だろう。

もうだいたい勘違いしそうだ。総務には綺麗系のお姉さんがいて、かわいい系の女の子がいて、色気のある女性がいて、そうだ、真崎はそういう綺麗な人たちに囲まれて仕事してて、しかも好意をもたれているんだから、自分は対象になるはずかない。だから、勘違いしてはいけない。

そこで、息を整えた。

空いている自分の手を真崎の手に添えて自分の頭からはずし、身を起す。

ちよっと彼の肩の感触が名残惜しいと思しながら、その気持ちを振り払う。

そしてちゃんと彼の目を見る。

「真崎くん、」

「呼び捨てでいいよ。」

「・・・無理。」

困った顔をした彼女を見て、真崎がふうわりと笑った。

「じゃあ、修一って呼んで。」

「・・・もつと無理。」

本当に恥ずかしそうな顔をした彼女をみてちょっと真崎は苛めたくなつたが、話が先に進まないの今は強制しないことにする。

「ポーカーフェイスでも、そうじゃなくても、真崎くんは真崎くんだよ。どの顔も真崎くんなんだよ。偽っているわけでもない。だからそんな風に、自分を偽って生きているって思う必要はないと思うよ。真崎くんが自分のことをそう思うなら、世の中みんな誰しもいるんな仮面をつけて、いろんな自分を演じて生きてることになる。だから、自分を追い詰めるような考え方はしなくていいと思うよ。

うわべの付き合いだつていいじゃない。付き合いえる範囲で付き合いえればいいし、もちろん気があう友達とはしっかりつきあえばいい。

もし真崎くんが人間関係を作るのが下手だと思っっているのなら、わたしはもつと下手だから社会生活不適應者になっちゃうよ。」

うまく言えない。伝えられないけど、もうちょっと楽になつてくれたらいいと思う。彼がもう少し自分を晒せる場所を見つけれたらいい。わたしは慣れない笑みを浮かべて、少しでも彼の気持ちが悪くなつてくれることを祈った。

ふ、と沈黙がおちた、次の瞬間。

わたしの体は彼の体にすっぽり包まれていた。

はじめはそつと、そしてまわされた腕の力はだんだん強く。

「ありがとう。」

そういう彼の言葉を耳元で聞いた。

わたしは彼の体に手を回し、きゅっと抱きしめた。

「筒井。」

店を出て、駅の改札で彼が声を掛けた。ここで、真崎とは別れる。

「なに？」

「茜って呼んでいいか。」

へっ？と変な声が出そうになったのをすんでのところで抑える。

「……いいよ。」

普通に返せただろうか。声が少し震えた気がする。

「俺も名前で呼んでくれない？」

また、ふうわりと柔らかく笑む彼の笑顔は不思議な引力があつて。

一瞬うなずきそうになった。

「……いきなりは無理かな。」

「そくだよな、茜だからな。」

そこでさらりと名前を呼ばれ、また心臓の拍動が早くなった。

「今日はありがとう。今度またお礼するから。」

「ううん、そんな、気にしないで。たいして役に立ってないし。」

「俺がお礼したいんだから、そっちこそ気にしないで。」

そう言つて、くすりと真崎は笑つた。

彼の笑顔がどうしようもなく好きだ、と思つた。

もうずいぶん長いこと、彼の笑顔に恋している。

「じゃあ、おやすみなさい。」

「ああ、おやすみ。」

軽く手を挙げて、真崎は去っていく。

それを見て、自分も改札を抜けた。

彼女のそばでは気を張らないでいられることは本当。

自分が癒される人でもあり、どうしようもなく手に入れたと思う人でもある。

控えめで一步引いてて、気配りが良くて。彼女は自分に自信がないのだけれど、そんなことはない。どうしようもなく可愛いと思う。

「でも、彼女を手に入れるには、もう少し時間がかかるかな。」
ぼつり、と真崎は帰り道で呟いた。

人間関係に疲れて落ち込んでいたのは本当。

でも、酔っ払っていたというのは嘘。

1次会では一滴も酒を口にしていなかったのだから。

おかげで心配してくれて、甘えさせてくれた。

「毎日抱きしめられたら幸せなんだけど。」

そしたら離せなくなつて仕事に行けなくなるか、と自分の思考にひとり笑った。

3 (後書き)

お読みいただきありがとうございます。

実はちょこつと策士だった真崎くんです。

茜はいつたいいつつ落ちるんでしょうね(笑)。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8902n/>

Short story 2

2010年10月11日00時04分発行